

中2で少年院／大学受験乗り越え

希望
この手に

沖縄の貧困・子どものいま

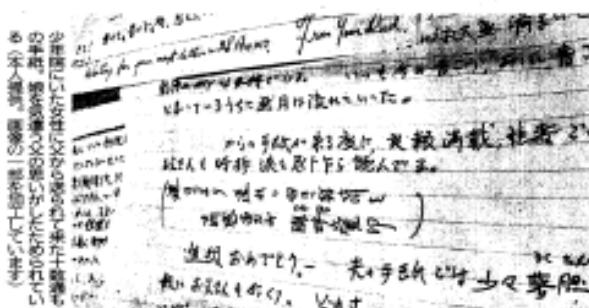
第1部 ⑰

非行
⑰

シンナーもやつた。仲間と吸いこまかに高鳴り、「嫌なことを忘れて優越感に浸れた」。心臓はぱくぱくして、目の焦燥は合はず、足元はふらついた。でも、現在30代前半の女性にとって、現実逃避できぬシンナーの魅力は大きく、気付けば中毒になつていて、学校にも通場所はなかった。心に寂しさを抱え、中学生になると家出を繰り返した。何ヵ月も友人や暴力団関係者の家を徘徊していた。洋服も化粧品も必要なものは何でも万引で手に入れた。もらったシンナーを売り、年齢を偽って知人のスナックで働いた。稼いだお金でタクシーに乗り、外食やカラオケも楽しんだ。「人生で一番喜いたくしていたかも」と振り返るほどだった。

父の心「今なら」

退院後も家計の厳しさは変わらず、16歳になるとすみにバイトを始めた。仕事は楽しく、それまでの「ヤンキーの世界」からは一変し、新天地が開けた。仕事に没頭する中、仕事を仲間の男子高校生と親しくなり、彼の後を追うよ



メモ 銀田と少年非行 沖縄少年院が2014年に発表した生育環境調査によると、13年度に仮退院した少年らのうち6割の家庭が生活保護レベルの貧困状態で、全員が保護者からの「暴力」「放任」を受けていた。調査した元コザ児童相談所長の山内慶子さんは「貧困イコール非行ではないが、貧困は非行の一因大きな要因になる」と指摘し、貧困対策の重要性を訴えている。

カレンダーに印を付けて面会を心待ちにしている」と、と頼つられた。そんな父の気持ちちは「大人目標で眺める今までの離婚も得た。父からの手紙は、唯一の贈品として大切に保管している。

子育て幸せかみしめ

に今から10年後は遙かに」、「月に2回〜3回の面会料は父は必ず来てくれた。話題にはたわいら話題」手紙もくわれたが、「難しい選択ばかりで我慢ない」と嘆たしまひふんだ。自由のない少年院生は「もう少しやりた」と、「絶対に戻らなければ」と書いた一年半

勤めて学費と生活費を捻出し、忙しかったが充実してい病院がなさぎだ。不幸は重なり、保証人になった知人にしつ話ができるようになつた。女性は毎に加えて夜も仕事を始めた。勉強よりもではなくなり大学は中退。仕事を介して連絡された。そして3年ほど前の冬、父は亡くなつた。

「がくんと地に落ちたあとだつた」。女性は胸中のつらい感情を受けてくれた真性となり、少年院時代にもらった手紙の意味も分かるようになつた。といった。そんな生活も、大学3年のとき父の病気が発覚して一転、とさ父の病気が発覚して一転、

(子ども貧困取材班)
(第1部終わり)